

江尻遺跡現地説明会資料

令和4年10月9日(日)
西尾市教育委員会文化財課

1 江尻遺跡とは？

本遺跡は、平成17年に携帯用基地局建設時に発見された弥生時代～古墳時代の集落遺跡です。

特に弥生時代前期の環壕（ムラの周りを囲んだ溝）は三河地方では2例しか見つかっていない貴重な事例です。弥生時代前期の三河地方では稲作はまだ行われておらず、縄文時代の伝統を引き継いだ生活を送っていたと考えられています。しかし、江尻遺跡から出土した土器には遠賀川式土器と呼ばれる弥生文化伝来の指標となる土器が多く含まれていたことから、江尻遺跡に住んだ人たちは、西の地方から移住してきた「弥生人」だったのではないかと考えられています。しかし、短期間のうちに集落は途絶えてしまったようです。



江尻遺跡周辺の主な遺跡

- 1 江尻遺跡
- 2 中之郷古墳（5世紀後半）
- 3 西幡豆市場遺跡（古代）
- 4 前田遺跡（中世）
- 5 天王遺跡（古墳時代・古代）
- 6 柿田遺跡（弥生・古墳・中世）
- 7 寺部堂前遺跡（古代・戦国時代）
- 8 寺部城跡（戦国時代）
- 9 講伏古墳（7世紀後半）
- 10 下山古墳（6世紀末～7世紀初頭）

2 今回の調査の目的

西尾市では平成25年より新編西尾市史編さん事業がはじまり、今月下旬には初めての本文編となる『新編西尾市史 通史編1 原始・古代・中世』が刊行されます。この編集にあたり、平成17年調査出土資料の再検証が行われ、遺跡の重要性が再認識されました。

そこで江尻遺跡の範囲確認とまだ見つかっていない弥生時代前期の居住域に関する遺構確認のために発掘調査を実施しました。調査期間は令和4年9月20日～10月14日（予定）です。



調査区位置図



平成17年調査写真（環壕）



平成17年調査写真（古墳時代の竪穴建物跡）

3 調査の成果

A区 西から東へ向かって台地が傾斜していることが確認されました。東端で見つかった石積みは、ほ場整備前の台地の裾部分であったと考えられます。

調査区の東側の遺構面は礫層となっていて、遺構は西側に集中しています。

調査の結果、古墳時代前期（推定）の竪穴建物1棟、古墳時代後期～飛鳥時代の竪穴建物、戦国時代の井戸などが見つかりました。

B区 田んぼの耕作土が遺構面のすぐ上まで堆積していたことから、多くの遺構はすでに削られてしまっていました。調査の結果、古墳時代後期の竪穴建物1棟（推定）、奈良時代の土坑2基（掘立柱建物跡の可能性あり）が見つかりました。

C区 B区同様に遺構面は削られていて、土坑が2基のみ見つかりました。

B区



よく似た形の土坑から、それぞれ奈良時代の須恵器が出土しました。掘立柱建物跡の柱穴の可能性はあるものの確定にはいたっていませんが、この付近に奈良時代の集落が存在していた可能性があります。

小野ヶ谷川を挟んだ対岸の寺部堂前遺跡（寺部廃寺）では大量の古代瓦が出土していて、8世紀初頭に寺院が建立されたと考えられています。

また、西幡豆町市場付近は幡豆郡衙（＝古代の役所）の有力な候補地となっていて、今後の発掘調査による幡豆地区の古代遺跡の実態解明が期待されます。



わずか数cmの遺構埋土のなかから出土した古墳時代後期（6世紀後半）の須恵器です。この遺構は形状から竪穴建物の可能性があります。

竪穴建物跡か？
（6世紀後半）

石組み
（近代）

南

A区

竪穴建物跡が複数重なっている遺構

調査区西側には黒色土が広く・厚く堆積していました。埋土中からは6～7世紀代の須恵器や製塩土器などが出土し、最下層ではカマドが見つかりました。

遺構の形状から複数の住居跡が重なっていると推察されます。



近代以降の石積み



石積の東側に堆積している黒色土は台地上から流れ込んできた土で、弥生時代～戦国時代の遺物が出土しています。



A区全景



カマド

古墳時代中期以降に普及したお鍋や釜を載せ、煮炊きにする施設です。何度も高熱を受けた土が赤く変色しています。建物の北側に設置されることが多いのですが、このカマドは西側に設置されたようです。

竪穴建物

後世の削平を受けていましたが、わずかな覆土と周溝が残っていました。東側は失われて、建物の規模を確認できませんでした。

調査区の壁付近では地床炉（下写真）が見つかりました。床面には粘土を敷いた「貼床」が確認されています。



まとめ

今回の発掘調査では、古墳時代前期・後期～飛鳥時代の建物跡が確認できました。特に古墳時代後期～飛鳥時代の竪穴建物は平成17年調査区とともに今回の調査のA区・B区でも見つかったため、広範囲に広がるムラであったと推察されます。

幡豆地区には7世紀代に造られた古墳が丘陵部に多数分布していて、江尻遺跡に住んでいた人々も造墓に関わっていたのかもしれない。

当初の目的であった弥生時代前期のムラの遺構を確認することはできませんでしたが、A区の各遺構内からは弥生時代前期の土器が出土していることから、このあたりまで弥生時代のムラが広がっていたのではないかと考えられます。弥生時代のムラの解明は今後の課題となります。